

て、他の治療者や公式の記録、さらに親たちが何と書いていようと、自分の直感を信じ、いつも子どもたちの声に耳を傾けなければいけないということが述べられる。第10章はネグレクトによる発達の問題がある少年に対して、小学校の級友が、少年の状態を理解することで積極的に受け入れるにいたった話である。そのことで少年の発達は促進されている。そして最後、第11章で著者は社会的サポートネットワークの必要性を訴えている。

わが国の現状を振り返ると、家庭養育が困難な子どもは、著者が最も重視している時期を乳児院で過ごすことになり、必ずしも子ども主体のかかわりが保証されるわけではない。また、養護施設に関してもレオンの話で見られたような、ともに生活する子どもたちが悪循環を増幅しあう可能性を考える必要がある。不適切な養育から間に合って保護されたのであれば、せめてこの時期だけでも適切な人間関係の保証を望む。本書を通じて「人間は学ばなければ人間的になれない。」ということになるべく多くの方に知っていただき、子どもたちがより適切な環境で育っていける社会を考えたいと思う。

(国立成育医療研究センターこころの診療部：
舟橋敬一)

自閉症のころをみつめる
—関係発達臨床からみた親子のそだち—

小林隆児(著)

岩崎学術出版社

(ISBN 978-4-7533-1002-9)

四六判 224頁 2,520円

昨今、精神科の診断は複数軸の視点でとらえているから、包含的で統合的だという人もいるが、私からいわせればそんな考えはとんでもない嘘っぱちで、本当をいえば一人の人間を深く理解するという意味では、実に平べったく深くも何もありゃしないものなのである。つまりところ一平面においてのみ患者の横顔をちょっとのぞき見しているだけで、そこには生きた人間の息づかいのカケラもない。そこで治療的な交流が生れるわけではない。そんなことで事足りりとする思考は、全くもって臨床には相反するどころか、破壊的でさえあると私はいいたい。そんな場に自分自身をおいているということの意味が分からない人に、なんで生きた臨床ができるのかと思う。私たち臨床家は、生きて苦しんでいて、どうにもならぬ深い淵に沈みこんでいる生の人間と向きあうべきなのである。そして自らもそういった苦しみ、痛みの中においてそれらを共に分かちあい理解を深めようという仕事をしているはずなのである。そういう関係性の中においてのみ臨床は成り立ちうるのだ。それ以外に一体、本当の臨床がありうるのか。自分自身を臨床とはちがうどこかの場においてきぼりにしておいて、どうして苦しんでいる人たちの痛みが分るだろうか。処理しきれない山ほどの苦しみを、やむなくさまざまな症状という型にして出さざるをえないという状況そのものに手当をし、思いを至すということなしに、臨床家は どうして治療という作業に身を挺することができようか。

さきほど「破壊的でさえある」といった意味

は少なくとも2つある。すでにしてもう十分傷ついて苦しんでいる人に対して、更に攻撃的・破壊的であるという意味と、もうひとつ、私たちが生涯の仕事と考えているはずであろうところの精神科臨床自体を破壊しつくそうとしているという意味である。端的にいえば自分自身を貶しめ、はずかしめ、傷つけているのである。そしてその事実が自分にはみえていないという悲劇とも喜劇ともいうべき事態がそこにあるのである。

数十年前のことだが、私は先輩の先生方から「患者と話をするのはバカだ」、「どうせ狂って訳の分らんことをいっている人の話なんか聞く意味がない」といわれて、ものすごく腹が立ったのを思い出す。どうやらこの考えは今もなお、生きていることのようにである。自分と患者とは全く違う次元に生きていて、交わることなどありえないというような考えなのであろう。

前置きが長くなったが、なぜ私があえてこんな苦言を呈するのかといえば、昨今、余りにも安易で無責任な臨床が広がっている事実注目してもらいたいからである。もっとも、安易で無責任なことをしているという自覚をもとうとしない人に向けてそういっても詮方ないことなのかもしれない。それは自分の苦しみ・悲しみ・淋しさ・怒りをそれとして認めようとしないうちに、かりそめの症状を呈するだけとなって、なお一層苦しんでいる患者さんの場合に比較されうるような状況と酷似しているというべきか。そのような状況があって、そして本書が登場したのである。

さて本書についてだが、自閉症のころをみつめる—とあるのだけれども、話はただ単に自閉症の治療についてだけではないのである。精神科臨床についてだけではないのである。精神科臨床の本来あるべき姿についての本気の話なのである。著者はそうは述べてはおられないが、私はどうしてもそう思う。本書は自閉症の子どもさんとその家族を対象とした臨床を述べたシリーズものの最新刊であるが、そのシリーズものとは

自閉症の関係障害臨床(岩崎学術出版社)2000
自閉症の発達精神病理と治療(同社)2001
自閉症と行動障害(同社)2001
自閉症とことばの成り立ち(ミネルヴァ書房)2004

自閉症の関係発達臨床(日本評論社)2005
よくわかる自閉症—「関係発達」からのアプローチ(法研)2008

自閉症とことばの臨床(岩崎学術出版社)2008
と、そして今回の出版につながるのである。

これらの書物の中で一貫して述べられていることは、要するに「人の発達というものを関係性の視点からとらえて、そこでくり広げられる関わりあいを通して発達の意味を捉えなおしながら、当事者のところを支援育ててゆく」ということである。これは著者の10余年前の東海大学におけるMother-Infant Unit(MIU)での臨床実践を通して得られた体験をその出発点としている。MIUのような今からいえば極めて贅沢な臨床はもはや不可能に近いことだろうが、しかしわが国におけるそのバイオエー的な臨床活動は極めて重要であって、その泉からは汲めどもつきぬさまさまの臨床的事実や諸概念がわき出てきているのである。それは今後はずっと続いてゆくことだろう。

本書は5章からなっているが、第一章は著者の臨床のやり方や発想について述べられる。第二章は臨床の実際の具体的な進め方の説明、そして第三章は記述の方法について述べられる。ここまでは序章のようなものである。

そして本書のハイライトである第四章では、ある自閉症の方とその両親との治療の(4歳から6歳までの)全経過を克明にえがききっている。これはもうものすごい記録で、このようなものは今までに出版された例がないといってよいだろう。ここに登場するのはある一つの家族だけではない。治療者も完全にそこにおいて、感じ、考え、行動し、反省したことのすべてを、それこそ関係性の中でとらえて詳述しているのである。それは激しく感動的なものである。これこそが精神科治療本来のあるべき姿であり、

本物の真髓にふれたものである。

第四章は150頁ほどあって、一旦よみはじめるともう途中でやめることができない迫真の記録である。自閉症といわれる人がなぜ自閉の世界にとどまらねばならなかったのか、そこから出てくるにはどんなころの旅をしなければならなかったのかが述べられている。また親が治療の中でどんなことを感じ、考えざるをえなかったのか、そして数々の失敗や反省や新しいチャレンジを通して、初めてさまざまなことが体験されてゆくその有様が詳細に、そして感動的に述べられる。治療を毎回ふりかえりながら母親が書きつけたノートが紹介される。母親とは少しちがった味の関係性のもち方を示す父親の効果的な、しかしごく自然な動きが示される。そしてそれらの働きかけを子どもがどうとらえて反応しつつ成長へと向ってゆくのかという変化の過程が、ありのままに述べられる。ああこの子はこんなことをこんな風に考え感じて、こんなことをいいかかったんだ—と伝わってくる。これまではある一定の行動形態でしか示すことができなかったことが、段々とことばをもって表現されてゆくようになる。その流れがありありとみえる。もちろん治療者はこういった一連の治療の流れの中にどっぷりとつかっているのであって、自分自身の過去の体験も、さまざまな感情の動きもすべて動員されてしまうのである。

ひょっとして、これを読みながら、涙を禁じ得ない人がいるだろう。子どもがもっているねばり強さ、真剣さ、そして親の真摯な覚悟と努力、更には本当の喜び、感動、新しい発見などはもうすさまじい勢いで読者にせまってくるのである。ここには著者の筆力もあづかって力があるだろうが、本書の編集に当られた方の力も大きかったのではないかと想像される。

そもそも自ら精神科臨床を志したものならば、誰しものが目標とし、aspireしてきたものがあるはずである。そこには打算的な妥協の余地はないはずである。その観点からすれば、本書は精神科領域の人々にとって必読の書であると

思う。その意味で私は著者に心から感謝を申し上げたいと思うし、尊敬の念を禁じえない。またここから更なる発展を期待したいとも思うのである。

(クリニックおぐら：小倉 清)